

基調講演 「デジタル化社会におけるボランティア活動」
～デジタル化はボランティア活動になじむのか～

講師 (株)九州地域情報化研究所 代表取締役 横山 正人 氏

皆様、こんにちは。今日は、皆様にお話をさせていただく機会を得て大変嬉しく思っています。皆様には少し馴染みの薄いデジタル化に関する話で恐縮ですが、本日は、デジタル社会におけるボランティア活動をテーマに、特に、デジタル化はボランティア活動に馴染むのかという視点からお話をさせていただきたいと思います。

まず、本題の話の前に、私もこれまで様々なボランティア活動に携わってまいりましたので、現在やっているボランティア活動を4つほど紹介させていただきます。

最初に紹介するのは、平和情報の発信と平和ネットワークの構築を目標にして、歌手のさだまさしさんと一緒に始めた、「NPO 法人ピーススフィア貝の火運動」での活動です。長崎の平和運動というと戦争反対や各反対といったテーマの活動が多いのですが、私たちは、「子どもたちの笑顔を守ろう」という視点から二十数年前に始めた活動です。一口千円の募金を数年かけて全国のさだまさしさんのファンを中心に集め、長崎県から土地を無償で借用し松が枝埠頭という外国客船が停泊する場所に、ちょうど20年前になりますが、平和について様々な視点から考える「ピースミュージアム」を建設し、現在までボランティアの方達と一緒に運営しています。3週間ごとに様々な展示やイベントを展開し、今日まで活動を展開しています。コンサートの開催や写真展や絵画展など様々な催しを継続しています。

二つ目が、これは私のライフワークにしていることなのですが、まちづくりに関するボランティア活動を展開しています。これまで離島や山間地など条件の悪い地域を中心に、そこでのまちづくりのお手伝いを九州各地で行ってきたのですが、その一環で、宮崎県、鹿児島県との県境にある熊本県の湯前町という奥地で12年前からまちづくりのお手伝いをさせていただいています。現在では、弊社のサテライトオフィスも立ち上げるとともに、ボランティア活動組織として、「一般社団法人奥球磨スマートタウン研究所」を立ち上げ、地方自治体と連携しながら、活動を進め、地域の方達と一緒にアイデアを出し合いながら人口減少が進む中で元気で賑わいのあるまちになんとか少しでも貢献しようと取り組んでいます。6年前からは、交流人口の拡大をめざすとともに地域住民が集えるカフェのオープンやマンガのまちとしての特色を生かした「まんが図書館」の運営や、様々な文化的展示ができる展示体験施設の運営などを行っています。地域雇用にも少なからず貢献できるようになってきました。

3つ目は、「シニアネット活動」です。これはシニア世代の生きがいづくりと社会参加を目的に20年前に長崎市で発足した活動です。この団体はあえてNPO法人化や社団法人化はせず、柔軟性を維持するためあえて任意団体として今日まで運営しています。具体的には何をしているかという点、発足当時インターネットが一般市民にも少しずつ浸透し始め

た頃だったのですが、今日のテーマにも関わることで、デジタルデバイド（情報格差）の是正に講演することも含め、パソコンやインターネットが使えるようになると、シニア世代もコミュニティの広がりが増えるのではないかと思い、新しい現代のツールも使いこなしながら広範囲のコミュニティづくりをしようと考え始めました。定期的な講習会や相談会、様々な文化的な諸活動を通じて生きがいや社会参加をしていただこうと、当初10名ほどの有志に声をかけて半年ほど時間をかけて準備を進め、活動を開始しました。半年後、組織を正式に立ち上げたのですが、予算もなく広報の手段もなく、どうしたら皆さんに参加していただけるかなと思っていましたが、幸いにも当時、地元の長崎新聞に月1回エッセイを書くことのできる枠をいただいていたものですから、時々宣伝がてら自分の思いを記事として掲載させていただきました。その効果もあったのか、キックオフのイベントには、なんと70名近い方が参加して頂き、そのまま会員になって頂くという奇跡が起こり、大変感動したことを今も覚えています。それから20年続けています。その間にも述べ1000名以上の方が会員として参加をしていただいたのではと思います。20年の間にはシニアの方たちですので、当然お亡くなりになったり、退会された方もいらっしゃいます。現在でも120名ぐらいの会員の方がいろんな活動を進めているところです。詳しくは後ほどお話をします。

最後の「Code for NAGASAKI」ですが、もう5、6年くらい前に始めさせていただきました。グリーンのところの三段目にCivic Tech活動とあります。

Civicは市民、Techはテクノロジー、技術ですね。市民と技術を掛け合わせた言葉でシビックテックという言葉があります。これは一般の市民の方が皆さんもそうだと思いますが、今まで長く生きておられると、それぞれが手にいろんな技術を持っていたり、また経験、趣味や仕事の中で培ってきたいろんなノウハウをお持ちだと思います。それは人それぞれ違うと思います。その異なったノウハウをお互いに持ち寄り、地域にあるいろんな課題をみんなで考えて、そしてみんなで解決してみよう、ということをしている団体がシビックテックです。今は全国でいろんなところに同じような活動がどんどん広がってきていますが、これも私が発起人になって長崎で始めたボランティア活動です。これはお年寄りから若い大学生までいろんな方が参加して今も続けています。現在、コロナでなかなか皆さん集まる機会が少なくなって来ておりますが、これまでいろんな活動を進めてきました。例えばコロナが始まった当初も、県や市の行政が出すコロナの情報が、パッと見ただけでは分かりにくいデータが多かったのが、個々のメンバーで考えて、地域に今コロナ患者が何人いるのか、どれぐらい増えてきているのか、グラフ化して簡単にいつでもホームページから見られるように、県や市からいただいたデータをもとに作って公開をする、といったことも進めてきたのが私たちシビックテックです。

私は過去にもいろんなボランティア活動に参加をさせていただきましたが、現在はこの4つのボランティア活動に関わらせて頂いています。

さて、今日のテーマですが、「デジタル化はボランティア活動になじむのか」ということ

でお話を簡単にさせていただきたいと思います。

皆さんもデジタル化というとなんとなく、わけのわからない、どちらかというとなんと触りたくないというようなところが多いのではないかなと思います。今日はそうでもないのだけどな、というところを感じていただければなと思います。

今日の結論としては、「デジタル化はボランティア活動になじむのか」という問いに対して「YES!」ということ、最初に言っておきたいと思います。

それでは今、デジタル化とかデジタル社会とか言われていますが、今どのように世の中が動いているのかということを紹介します。

一つは、最近よく使う言葉で、「Society (ソサイエティ) 5.0」という言葉があります。皆さん聞いたことあるかどうか分かりませんが、この5は、1・2・3・4・5の5ということです。何を意味するかというと、第五世代という意味です。

我々人間の進化を見てみますと、大昔の原始時代というのは狩猟社会から始まっています。自分たちでいろんな獲物をとって、それを食べて、生きながらえてきたわけです。こういう狩猟社会が第一世代です。だんだんと人々が集団で暮らすようになったのが、まさに農耕社会です。米を作ったりいろんな野菜を作ったりして暮らしを立てていく、農耕社会が長く続きました。そしてだんだんと文明が進化していく中で工業化社会、つい最近まで日本も工業化社会で先進国の仲間入りをしてきたわけですが、こういった時代が第三世代と言われています。そのあとに続いたのが情報化社会で、インターネットが出てきたり、スマートフォンが出てきたり、いろんなものが私たちの生活の中にも生まれてきました、この辺を第四世代と言っています。この先、これからの近い将来という意味で、第五の世代、Society (ソサイエティ) 5.0という言い方をよくします。今、こういう社会を目指してデジタル化がどんどん進んでいるので、国もこういう社会を目指して国づくりをしていくために、いろんな動きが出てきているところです。これはあとでレジュメを見ていただければ、と思います。

ここに書いているようにデジタル化というとコンピューターとか、インターネットとか、非常に機械的な感じがしますが、そうではなく、「人間を中心にした考え方で、コンピューターやインターネットに踊らされることのない社会を作っていくことを目指している」というのが、国もそうですがいろんなところでの考え方になっているということです。今の時代は、いろんな技術がどんどん進化してきているということです。

「デジタル技術による新たな変革」

左上にあるのは、皆さん最近よく聞くドローンでプロペラがいくつか付いていて、飛行機のように空を飛ぶ、最近こういうドローンを使ったいろんな作業が非常に増えてきました。農家では農薬を撒くのもこのドローンに農薬を積んで、田圃をずうっと回るといったのが今の新しいやり方です。さらにそれが進んで、どこでもここでも農薬を撒くという時代から、出来るだけ農薬を使わないようにしたいということもあり、害虫でやられた部分にピンポ

イントで農薬を撒くこともできる、という時代にもなってきました。

いろんなドローンの使い方があり、今、人間の生活に非常に密着したところでの使い方がどんどん進んでいます。ちょうどその絵で、実はこれ長崎県の五島列島で運用に入っている一つで、こういう結構大きな荷物をドローンの下に付けています。

ANAと書いています、全日空が関係して一緒にやった実験です。

実は離島というのはいろんな意味で物流は船で運ぶのが主ですが、特に医薬品などは緊急を要し、時間がかかるのは非常に困るわけです。そこで最初に始めた実験では医薬品を、長崎の方からドローンを使って島に運ぶということも実際にできる時代になってきました。一昨日ぐらいの新聞に載っていましたが、今、街の中でもこういったドローンで荷物を運ぶことがだんだん許可される時代になってきつつあるということです。

右側の写真には牛がいますね。牛が眼鏡みたいなものをかけています。これはどういうことかという、乳牛の、乳の出を良くするために、このメガネのような中に青々と茂った草原にいる映像を見せ、牛の心を穏やかにしようという試みです。現実の世界は冬だと青々としていませんが、このような映像を見せながら乳の出をよくしよう、と使われる時代になってきています。

もう一つ、急速に進もうとしているのが一番下にある写真です。

これはドローンの進化系です。空飛ぶ自動車、これからの社会は自動車が空を飛ぶという時代が今まさに来ようとしています。2025年には大阪万博が開かれます、その万博でこういう空飛ぶ車も動かします。このようなことが今、技術的には可能になって、あとは法制度等いろんなことに取り組み始めているところです。このようにちょっと前まで夢のように感じていたものが、いろんな形で現実味を帯びてくる、という時代になってきました。

今、社会がどんな風が変わってきたのかというのを、最後にお見せしたいと思います。

三つ赤で書いていますが、

一番目はやっぱり「遠隔で可能になった様々な社会システム」

下にある文字を見るとオンラインという言葉が結構多くあります。

オンラインでというのは、インターネットで繋いで遠く離れた者同士がいろいろコミュニケーションをとるという形です。2・3年前から始まりましたコロナ禍の中で、いろんな企業でも会社に行って仕事が出来ないという状態が続いてきました。そういう中で会社員の方も自宅で仕事をするテレワークという働き方、インターネットを使って仕事をする、必要な時にはオンラインを使って会議をする。これが当たり前の時代になってきました。

実は今、私は福岡に住みながら長崎県庁のアドバイザーとして毎週通っています。

そんなにしょっちゅう行くわけにいかないの、週二日行っています。その他はすべてオンラインで会議をしています。そういうことがちょっと前までは非常に抵抗感がありましたが、今は当たり前の時代になったようです。

実は大学で非常勤講師をしていました。コロナになってから大学の講義も 90%ぐらいがオ

ンラインでした。最終講義もオンラインでしたので、学生の顔を全然見ずに終わってしまいました。何十年も教えてきて、非常に寂しい思いをしながら辞めました。そんなのが当たり前の時代になっています。

最後にワーケーションという言葉があります。あまり聞いたことがない言葉ではと思いますが、ワーケーションは、働くというワークと、楽しむというバケーションを一緒にした言葉で、楽しみながら働く、働きながら楽しむ、ということです。

最近では地方に出張じゃないけど行って、例えば島に行って釣りを楽しみながら片手間に仕事をする。仕事をしながら片手間に釣りをするというどちらでもとれる、そういうような働き方も出来る時代になってきているということです。

二番目はこれから皆さんたちに直接かかわることですが、「いろいろな新しい技術やサービス」が生まれてきています。

福岡市に住んでいるとそれほど感じませんが、田舎に行けば行くほど人口が減り、いろんな公共的なサービスもどんどん減ってくる。例えば一番困っているのがやはり公共交通機関がどんどん減っているということです。そのために買い物や病院に行くにもタクシーを呼んだり、いろんなことをしないと行けない。そのような中で、今は遠隔診療であったり、それからオンデマンドバスのようにスマホで何時頃にどこどこに行きたい、と打てば自動的に近くまで乗り合いタクシーであったり、乗り合いバスが来て、目的地まで連れて行ってくれる。こういうサービスが出てきています。

私は今、東区の照葉というところに住んでいます。あの近辺も最近ではオンデマンドバス、マイクロバスが運航していて、近くの千早駅とか、イオンとかに買物等で出かける、交通機関まで普通の西鉄バスではなくそれに乗れば連れて行ってくれる、このようなサービスが福岡でも進んでいます。

そういったものがどんどん生まれてきている時代だということです。

それから三番目は「データが活用される社会」

これは皆さんたちには実感的に馴染まないかもしれませんが、私たちのいろんな生活や仕事も含め活動の中で、日々刻々といろんなデータが集まってきます。

こういったものを上手に使うと私たち市民へのサービスもどんどん新しいものが生まれてきますが、今までそういったデータという概念があまりなかったので、そういう社会から少し考え方を変えて、せっかく世の中でいろんなデータが生まれてきているので、こういったものを上手に活用することによって地域や社会の課題といったものを解決していこう、という動きが多く出てきています。

「デジタル化の進展に伴う社会の変容」

次に「あらゆるモノがサービスとして利用される社会」と書いています。

考えてみると私たちは今まで、若い時から働いてだんだん給料が上がってくると、皆さんの時代でもそうだったと思いますが、小さい頃は家に電話もテレビもありませんでした。

そういう世代からだんだんと親の給料が上がってくると家に電話がついたりテレビがついたりいろんなものが増えてきて、最後に「我が家でも車があるやん」と子供の時にビックリした思い出があります。今一番代表的なのは車だと思います。

車もだんだん高くなってきて、所有するという時代からシェアする時代に、シェアカーというのがあります。

福岡で一番多いのは自転車ですね。いろんな所に赤い自転車が置かれていて、それをみんなで共有して、使いたい時だけお金を払って使う。自分のお金を使って物を買うのではなく、サービスを買う。そういうスタイルに今まさになってきているのではないかと思います。

それから真ん中の、「リアルな価値が再評価される社会」

これは逆の形ですね。デジタルがどんどん進む中で、実はその裏でまさにリアルな社会が改めて評価される、という時代になってきたということです。それでいろんな交流や体験といったものが今非常に大事なものと再認識され、デジタル社会がどんどん進行すると同時にこういったリアルな社会を大事にしていこう、という形も一方で生まれてきています。

最後は、「様々な価値観を持つ人が活躍する社会」

今までの社会というのはどちらかというと既定路線に乗った形で学校を出て仕事をして、そしてだんだんと年を取っていくという形でしたが、新しい仕事への関わり方をする若い人たちが福岡でも非常に増えてきています。会社に入ってサラリーマンをしていくという人も当然いるわけですが、いろんな形で自分のもてる力を活用し、それを社会の中で生かしてお金を稼げる時代になっている。そういう意味で今は若い人たちも多様な生き方ができる時代になってきた、というのを非常に感じます。

最後に少し難しい話をします。

多様性の世の中で生まれているのがなにかというと、これは皆さんのプリントにはありませんが、折角ですので少しお話をしたいと思います。

今、「DXという言葉」が世の中で非常によく使われています。このDというのはデジタルのDです。Xというのはちょっと難しくわかりません。

実はDXの英語訳というのはデジタル・トランスフォーメーションでDT、Tを使うはずが、Xを使う。その理由は次にお話をしますが、これからどんどんデジタル社会が進化していくと思います。デジタル化をしないといけない、企業も行政も市民生活もみんなそんな風に使われています。だけど考えてみてください。デジタル化というのはあくまで仕事や生活面でもそうですが道具でしかないということです。確かに昔のカメラはフィルムをいれて写真を撮っていたのが、今はデジカメになってきた。カメラをデジタル化したことでいろんな価値が出てきました。だけどそこで終わっているのです。それでXがついた、このDXは何か。単にデジタル化するのではなく、デジタル化社会がどんどん進化していく中で、今までアナログでやってきたことを単にデジタルに置き換えるのではなく、会社なら会社が組織

として根底的にその在り方をもう一度見つめ直そうとしています。

例えばお役所というのは、何でも一番古めかしい昔のスタイルというふうに考えがちですが、そういった行政の風土、必ず印鑑を押さないといけないとか、“印鑑なんているの？”と考えたことありますかという形ですね。

そういう風に今の世の中の在り方、組織の在り方、いろんな仕組を根本的に考え直し、そして一番いい方法を見つけていきましょう、というのがまさにDXなのです。

後ほど福岡県の方からご紹介もあるかと思いますが、今は企業もお役所もそうですが、いろんな形で活動を進めているというところです。

最後に「これからのボランティアとデジタルの関わり方」についてです。

わたくしは二つあると思います。

一つは「ボランティア活動を支えていく為のデジタル化」ということ。

もう一つは「デジタル社会を支えていく為のボランティア活動」

この二つの接点があるのではないかなと思います。

まずはボランティア活動、皆さんもまさにやっておられますが、私もいろんなボランティア活動をしていたときに、いろんなことで悩んできたものが沢山あります。

まずは、自分たちのボランティア仲間を増やしていくこと。その為にはやはり「ボランティア仲間とのコミュニケーションをとる」ということが非常に大事になってくると思います。なかなか対面で集まる機会も少なくなると、尚更どうやってコミュニケーションをとるのかということが大事になってくると思います。メールを使ったり、最近ではLINEをお使いのシニアの方も増えてきました。それからオンライン会議、こういったものを使ってのコミュニケーションのあり方を、今の時代に即しながらうまく使っていくと、非常に自分たちの仲間内のコミュニティも出来てきます。

もう一つは「いろんなボランティアの組織が沢山あります」

そういったところをどういうふうに繋げていくかということも非常に大事なボランティア組織の中での役割になるかと思っています。こういった意味ではまさに今のデジタル化というのは非常に有効になってくるのではないかなと思います。

先ほど私が紹介した、シニアネット長崎もそうですが、毎年、百何十名かの会員さんがいました。最初はメールが使えるという方は30名ぐらいだったと思います。これも皆さんで教え合いながらやっていったわけです。連絡はホームページ、Facebook、それからメールといろんな伝達手段を使いながら、今はそれが当たり前のようになっているのです。

そうすると刻々と情報を伝えていくというのが可能になってくる。今、このコロナ禍の中で集まってボランティア活動がなかなか出来ない、そこで始めたのがオンライン相談会とかで、ついにはオンライン飲み会まで始まりました。月に一回オンライン飲み会をやっています。このシニアネット長崎はいろんなオフ会がたくさんあります。

メンバーに日本酒のソムリエの方がいらっしゃって、月に一回はどこかの飲み屋に行き、お

酒は全部持ち込みで料理だけ頼んでやっていましたが、最近に行けないからオンラインでやりましょう、と皆さんそれぞれパソコンでオンライン繋いで、それで自分の前に徳利とちょっとしたつまみを用意して、二時間ぐらいお喋りをしています。結構面白いですよ、私も良く参加しています。意外なことになぜか対面で集まっている時よりも、ちょっとずつ飲みながらお話すると色々な意見が出て、“今度こげんことしようや〜”とか、実現するのに時間がかからず出来るようになっていきます。

二番目にあるのは、「組織経営の効率化」という、ちょっと堅苦しい名称で書きました。何がしかの組織を作るとそこに色々な事務的なものが出てきます。これを出来るだけ紙ベースを無くしていこうということです。

ここではいろんなパソコンも当然使いますが、いろんな道具を使ってそういうものをデジタル化していくことによって組織の効率化を図っていくというのは進んできています。

三番目に「組織の広報活動」。これもホームページを出していくというのはずいぶん昔から始まったことですが、今はいろんな形の SNS と呼ばれるツールがございます。私が熊本でやっている社団法人では、SNS を本当にふんだんに活用した活動を進めています。

実はスタッフを雇用する時も、ハローワークに頼んでも事務局のスタッフには応募者が集まりません。最近はというと、ご存知かどうか分かりませんが、インスタグラムというのがあります。これで実は求人情報を投げたんですね。すると翌日には応募がありました。コロナになってからは新しいスタッフの皆さんは、ほとんどがインスタで入ってきました。ハローワークからは全然来ないような感じに変わってきました。そういうこともあるんですね。ではなぜそうなるかという、常にうちの社団法人の広報活動を、そうした新しいネット社会の中、いろんな形で日々情報発信をしているということです。だからこれをみてくれる人が多くなってきた。そういう中で求人を出すとそれじゃあ私ちょっと参加して一緒にやろうかなと、そういう人が出てくるということです。そういう新しい使い方もできています。

次にもう一つ、最近はいろんな企業がこういう仕組みを提供していることもありますが、ボランティアマッチングサービス、新しい仲間を増やすということもそうですが、もう一つはボランティアをしている時の一つの大きな課題として、ボランティアをしたい人と、してもらいたい人、この双方のマッチングがなかなかうまくいかないという思いがあります。実は私もまだインターネットが世の中に普及してないころからこの「ボランティアマッチングサービス」というのを少し進めていました。ずいぶん前になりますが、長崎県で雲仙普賢岳が噴火しました。もうずいぶん昔の話です。最近のいろんな震災もそうですが、実はその時にボランティアがいろいろ活躍してくれました。ところが雲仙普賢岳が沈静化して何年か経つとそういったボランティアの意識というのが薄くなっていきました。“それじゃいかにやろ”と多くの方にボランティアの意識、感覚をずっと維持していただきたい、という意味では日常の中でちょっとしたことでも、ボランティアに頼みたいことがあればすぐに探せるような仕組みを作れないかと、実はまだインターネットのない時代に、国から少し補助

金をいただいてそういった仕組みを作ったことがありました。最近はこういうボランティアマッチングサービスを提供している企業も増えています。こうした新しいやりかたもデジタル社会の一つの仕組みかなという風に感じております。

それから「デジタル社会を支えるボランティア活動」です。

現在、国は人にやさしいデジタル化を進めていき、誰一人取り残さないことを目標に、デジタル化を推進していこうと考えています。これは正しい考え方だと私も思います。一番の問題は何かというと、今皆さんたちもマイナンバーを取得されている方は結構増えてきていますが、市町村によっては80%を超えてマイナンバーを取得している自治体もあるようです。ところがマイナンバーひとつとってもそうですが、新しいデジタル社会の仕組みを、使える人は使えるけど使えない人には何の利益も出てこない、逆に世の中が全部デジタルという仕組みが出来てくると、使えない人は本当に困った社会になる。だから少しでも多くの人に使える環境を提供していくということが非常に大事になってくるということです。実は国も一番下に書いているようなデジタル活用支援推進事業というのを昨年から始めています。全国で多くの方が無料でこういう体験が出来るような機会を作ってきたところです。国がやるということは、無限にお金があるというわけではないので、当然受ける方は一回とかという形になって何の良いところがあるかなあ、という感じはいつもしています。私の会社もこういった事に関わったこともありましたが、今はもう止めています。大事なことはこの橙色で書いているところですね。

「ボランティア的組織による支援活動」。これはそれぞれのところで作っていくことが非常に大事だと思っております。

私は20年前にシニアネット活動を始めたのも、まさに今と同じようなインターネットを普及させるという意味で始めました。今まさに同じことが起ころうとしているわけです。これから急速にこのデジタル社会というのは進んでいくわけです。

ところが、こんな支援活動ボランティア、私たち自身が教えてもらいたいのにそんな力なんてあるわけないとおっしゃる方も多と思います。ところで我々人間はみんなオールマイティの専門家である必要はないんです。すこ〜し何かをかじったぐらい知っていることもある。そういったものをお互いに知らない人に教え合うような形が一番ベターでは思っています。これがまさにシニアネット活動ですね。

実は、福岡県にはシニアネット福岡、シニアネット北九州、シニアネット久留米と3つの大きな団体があります。それぞれ活動は似てるところもあれば違ってるところもあり、営利を目的にしているところと様々ですが、共通して言えることは何かというと、ICTをツールとして活用し、シニア世代の交流の輪を広げる。それから自ら主体的に社会参加をしてもらうこと、これが大きなところです。そういう中で生きがいや地域における学びの共同体を作っていきたい、と私も始めたわけです。特色は何かというと、一般的な生涯学習のように先生がいて生徒がいるという形ではなく、先ほど言ったように、一人一人がみんな先生であり、

生徒であるという、お互いに知っていることを知らない人に少しずつ教え合おうという組織なのです。

現在も、皆さんが毎週集まって相談会を開催しています。時間も午後の一時から四時半ぐらいまでの間、いつ来てもいいしいつ帰ってもいい。自分が知りたい、ちょっと分からないことがあったら教えてもらって、“あ、分かった”、で帰る。そういう中でやっています。結構そうして知らないことを教えてあげた側というのは実は非常に満足感を得るんですね。時々アンケートとかを取ると、自分に自信がついた、生きがいを持てるようになった、と回答があります。

それからこういう集まりを例えば町内のような見知った者同士の集団の中で行わずに、広域で開催したところに特徴があります。最初は、クチコミ中心でしたが、いろんな媒体に取り上げられたこともあり、次第に広域に広がってきたんですね。いろんな方がいろんな形で参加する、今まで接することのできなかつたエリアの方同士がお友達になり、非常にコミュニティの輪が広がってきています。そういう中で、こういうパソコンを前にしたような活動だけじゃなくていろんなオフ会といいまして、いろんな活動、文化的な活動をするということで、月に一回はいろんな博物館とか美術館、こういったところもみんなで学芸員さんをお願いして鑑賞会をしたり、音楽の集いをしたり、こういう風な文化芸術的な活動もどんどん広がってきているということです。

このようにして、お互い教えあっています。

ある方は、当初メールも出来なかったのですが、ここでいろいろ勉強を始め、長崎県で動画の映像作成でグランプリを取りました。もう今や動画関係に関してはこの人が第一人者になって、皆さんにいろんな事を教えるようになっていきます。そんな活動を進めております。

それから最後に一つだけお伝えしたいのが、新しいボランティア活動として、これも私が関わったことの一つですが、地域のいろんな伝統文化というものを、後世に残していくというのが非常に大事になってくると思います。公立の美術館や博物館は当然その役割を担っていますが、例えば地域に神社があるとします、その神社にもいろんな天井絵馬があったりします。ところがこれもちゃんと管理をしないと、だんだん古くなると薄くなって最後にはおそらく見えなくなっていくだろうと思います。せっかく地域に素晴らしいこういう天井絵馬があるのに、なんで残していかないんだろうという思いがありました。

これも 15 年ぐらい前のある地域の方から、“先生これをなんとか残したいけど” という相談を受けたことがありました。地域に眠っているいろんな文化財、こういったものが国や県・市が指定している文化財以外にもたくさんあると思います。

このようなものを後世に残していく、そして地域の子供たちにそういったものを見てもらう、このような機会を作っていくということは非常に大事だ、と日ごろから思っています。こういう事をやるボランティアもこれから生まれてきてほしいな、といつも思っている所です。

ちょうど今、私の会社がある自治体に頼まれて、美術館の所蔵品を全部デジタル化して、デジタル化したものを保存しておくだけではなく、一般に公開していく。そして誰でも見たり、著作権が切れた物はだれでも取り扱うことが出来る、こういう環境を作っていこうということに関わらせていただいております。このようなことがこれから生まれてくるのではないかなと思っております。

長くなりまして大変申し訳ありませんでしたが、今日の回答は是非ボランティアの中でデジタル化というのは、これからも非常に関係のあるものだということを、是非今日一つだけでも記憶に残していただければと思います。どうもありがとうございました。

~~~~~\* \* \* \*~~~~~

司会

「横山様ありがとうございました。それではここで質疑応答の時間とさせていただきます。ただいまのご講演に関しましてご質問ご意見等がございましたらその場で挙手をお願いします。それでは発言の前に所属名とお名前をよろしくをお願いします。」

質問者

「これからのボランティア活動に関して大変有益なお話をいただきまして誠にありがとうございます。私は春日市の奴国の丘歴史資料館の S と申します。このコロナ禍の間で、私どもの資料館博物館もかなりデジタル化が進みました。進めざるを得なかったということが現実だと思います。特に春日市は市の面積の大体 20%近くに弥生時代の遺跡が集中しておりまして、それが学校や公共施設、あるいは住宅の下に埋蔵されて見られないのです。それで VR とか AR とかの導入、それからデジタルアーカイブ化して学校教育に利用出来るようにして、私どもは博学連携といったタイトルで勧めてきたところでございます。そこで質問です。何か示唆をいただければと思うのですが、そのようにしてデジタル化がどんどん進んでいくんですが、実はわたしもそうなんですが、これまで資料館のガイドをやっていました。展示物、遺跡のガイドです。その場合、これがデジタル化が進んでいくと、私どもの役割ってのはいなくなるのか(笑)、あるいは何か別の形に変わるのか、今日の話ではリアルな価値が再評価されるということで、先生としては具体的にはどんなことをお考えだろうか、というのをもしアドバイスしていただければ誠に幸いです。よろしくお願いいたします。」

横山氏

「今ご紹介していただきましたように、いろんな博物館等でもずいぶんデジタル化が進化しつつあるんですが、今日は言葉に出しませんでした。最近ではメタバースという言葉でよく言われるようになってきました。」

人間自身も架空の、アニメのような人物像を出したりして、そしてバーチャルの世界のなかでいろんな博物館の紹介とか、そういう風な仕組みもこれからどんどん出てくるんじゃないかなという風に私も思っています。

個人的には、どうもしっくりこないというか、情報をやってる人間が言うとおかしいですが、どうももう一つまだ馴染まないというのがあります。

これは何かというと、我々人間がダイレクトに対面でやるときのコミュニケーションの在り方というのは、我々は五感を使ってやっているというところだと思います。

例えば今のガイドなんかもまさにそうなんです、我々が人とお話をする時というのは相手が今どんな感情なのかというのを、自然に感じながら話している。相手が、例えばいま怒っているときにヘラヘラ笑っているような形で答えないですね。相手とのそういうものを自然と我々人間は五感を使って感じながら、相手とコミュニケーションをとる。そこまで実はデジタルの世界の中で先までいけるかという、まだまだ無理だと思っているんです。

私は実は大学で博士号を取るときの研究テーマがまさにそういうことだったんですね。人間の感性というのをどう機械に置き換えられるか、ということだったんですが、非常に難しいと思います。だからそういう意味ではやっぱり生の人間がやっていくものの重要性というのはこれはやはり少しでも残していく。残していくというのも変ですけども、やはり大事にしていくことが一番大切だと思います。

そういった意味でボランティアの方たちに一つお願いしたいのは、そういうコミュニケーションをどんな風にとっていくのか、こういうことって非常にきちんと考えていかないといけない大きなテーマだというのはいつも思っているところでございます。ちょっと答えになったかどうかわかりませんが・・・。」

司会

「はい、ありがとうございました。よろしいでしょうか。ほかに。では改めまして、横山様に大きな拍手をお願いいたします。」